

## DERAWAN / SANGALAKI インドネシア秘境クルーズの旅



2008.9.21 ~ 9.27 乗船  
WTP スタッフ 水垣 歩

タラカンの港入り口は、小さな島々に行く高速船に乗る人達で混雑している。

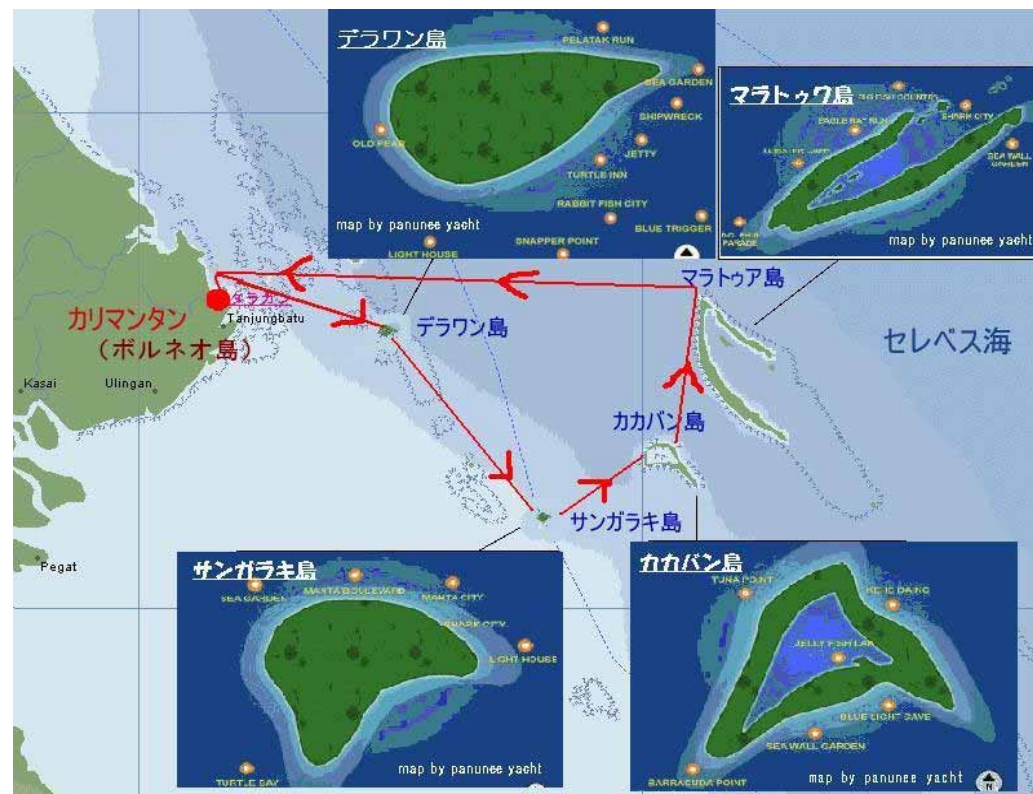


水上には家々が立ち並び一つの集落となっている。そこには生活用品やお菓子などの食料品を売るお店も立ち並んでいる。子供達の屈託のない笑顔がとても印象に残った。

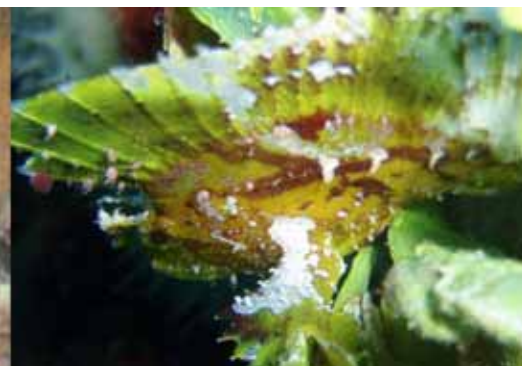


デラワン・サンガラキクルーズといわれ、まずはどこの場所だろう、と調べることから始まった今回の視察。調べるのにも情報が乏しい。というのも、アクセスの不便さから、そう気軽にいけるところではない場所。ただ訪れたことのあるダイバーは、この海の魅力にはまってしまうという。そんな私も今回訪れてみて、この海に魅了されてしまった一人になってしまった。マクロもワイドも両方こんなに堪能できる海は、そうそうないのではと思う。それぐらいマクロ・ワイドとも充分楽しめる海だった。そしてポイントは、貸切り状態。私達だけで、他のダイバーは見当たらない。ノンストレスのダイビング。

日本からの移動方法はいくつかあるが、今回とったルートはまずはジャカルタまで移動し、トランジットホテルで1泊。国内線に乗り換え、ボルネオ島にあるタラカンまで移動。タラカンの港よりクルーズ乗船、8時間かけデラワンへ。移動までに少々時間は要してしまうが、夜寝ている間にポイントに到着。朝サンデッキに出て見ると、何処までも青い海が目の前に飛び込んできた。デラワンを初め、ポイントとなる小さな島々をクルーズ船で巡る。デラワン サンガラキ カカバン マラトゥク。これが今回とった航路。ダイビング航路はその時乗船しているゲストの好みやリクエストに合わせ、毎回若干違う。今回、私達は時間が無くいけなかったのだが、SAMAMA という島の回りもダイビングポイントになっている。一つ一つの島は少し離れているため、リゾートに滞在していると移動が中々難しいところ。リゾートまでもたどり着くのが大変な上に、ポイントを回っていくとなると、またダイビング事に毎回長い移動を要する。今までダイビングクルーズはない海。ダイビング手段はデイトリップのみ。この海に魅了されたパヌーのオーナーが、デイトリップの移動の大変さをなくし、楽にポイントを回れないかと思案し生まれた今年初クルーズ。このパヌーヨットでのクルーズのおかげで、一つ一つのポイントに行くのに移動がかなり楽になった。



## ダイビング1日目 DERAWAN



今日1日のダイビングは全部で5本。

CATE JETTY, TUTUTUKA, SNAPER POINT, CORAL GARDEN, MANDARIN JETTY.

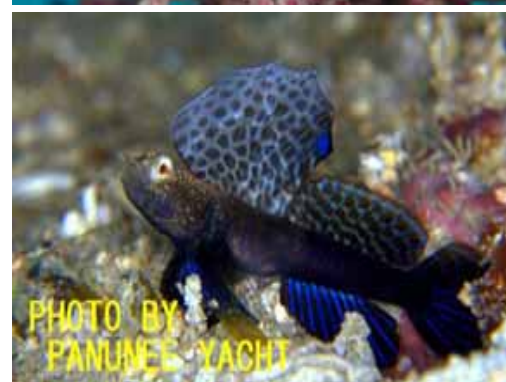
1本目のダイビングはなんと、朝の5時エントリー。こんなに早くエントリーをするにはある目的がある。その目的とは、ジョーフィッシュのハッチアウト。パヌニーのオーナーやダイビングスタッフが苦労をして調べた分析によると、満月の夜から8日目～9日目の午前5時半～6時の間にハッチアウトをするとのこと。今回は丁度満月から8日目に当たる日。眠い目をこすりながら、ハッチアウトを見るためにジョーの巣穴をみんなで囲み、暫し待ってみる。しかし、ハッチアウトをしそうでしない。口の中で卵をモゴモゴさせるだけ。結局この日は6時まで頑張ったが、私の見つめていた穴はハッチアウトせず、口の中に卵を大切に抱えたまま終わってしまった。別の巣穴を囲んでいたチームはハッチアウト成功した模様。今回は残念だったが、明日の朝もハッチアウトダイビングに挑戦できるとのことだったので、楽しみは明日に持ち越しとなった。

TUTUTUKA, SNAPER POINT, CORAL GARDEN では、マクロ天国の海。

ダイバーの人気者、ピンクの色彩が綺麗なピグミーシーホース、通称ロボコンと呼ばれるクリクリな目が可愛いアナモリチュウコシオリエビ、目のところに綺麗なラインが数本入っているデラワンバージョンのフタイロカエルウオ、背鰭を開くとヨットのセイルのように綺麗なホタテツノハゼやニチリンダテハゼ、鮮やかなピンクの色彩のピンクスクワットロブスター、そして動きが可愛いカニハゼなど、まだまだ書ききれないくらいマクロが満載。

この日最後のサンセットダイブの目玉はニシキテグリの求愛。刺激をしないように気を配りながら赤眼ライトで照らし、ディスプレイをじっと待つのだが……。ダイバーに囲まれ緊張してしまったのだろうか、今回は残念ながら求愛行為は失敗。ただ2匹仲良く連れ添っている姿は見る事ができたので、私は、それだけでも満足だった。

そして、ピグミーフォースの第一発見はこのデラワン。今回一緒に潜ったダイブマスターが、私が発見したと話していた。数年前のマリンダイビングの記事を大切に保管しており、その記事を見せてもらったら、そこにはピグミーの写真と彼の笑顔写真が掲載されていた。



## ダイビング2日目 DERAWAN&SANGALAKI



本日のダイビングポイントは、午前中に DERAWAN のジョーフィッシュのハッチアウトリベンジの為、もう一度 CATE JETTY,そして CORAL GARDEN、午後は SANGALAKI に移動、MANTA CLEANING STATION,MANTA RUN そして ナイトダイビングの5本。

今回の1本目も朝5時にエントリー。本日は無事にハッチアウトに立ち会うことに成功。数回に分けて口内から外の世界へ送りだしていく。新しい小さな小さな命が何百匹も外の世界へ懸命に泳いでいく姿は感動的な光景だった。2本目はピンクフラッシャーを観察。和名はクジャクベラというそうだが、フラッシャーという英名のほうが、親しみがありピンと来る。この魚はオスがメスにアピールするときや威嚇するとき背鰭を広げアピールし、その瞬間の姿がとても綺麗。

午前中の早い段階に2本ダイビングを済ませ、SANGALAKI に移動。DERAWAN からサンガラキは1時間少々。SANGALAKI といえばマンタ。いくつもポイントがあるが、ほとんどのポイントがマンタに関係した名前が付いている。DERAWAN でのまったりマクロダイブと違い SANGARAKI はドリフトダイビング。マンタとの出会いを期待しエントリーしたが、残念ながらマンタは留守だった。ここにはプランクトンを捕食しにマンタが集まってくるのだが、今回は抜群の透明度。ということはプランクトンがない。餌になるプランクトンがないので、当然ながらマンタもいない。透明度の良いマリンプルーの海に永遠と続く真っ白な砂の中を流れに身を任せて漂っていくのは気持ち良かったが、マンタとの出会いが無かったのは残念なところだった。ナイトダイビングでは赤毛に包まれたオラウータンクラブなど甲殻類が観察できた。



## ダイビング3日目 KAKABAN&MARATUA



夜のうちに SANGALAKI を離れ明け方には KAKABAN へ到着。今日のダイビングは KAKABAN の CONER WALL、島に上陸し JERRY FISH LAKE でシュノーケル、その後 MARATUA に移動し、CHANNEL で2本。

KAKABAN はまた SANGALAKI と違いドロップオフになっており、ダイナミックな地形の中をドリフトダイビングしていく。

CONER WALL では中層には回遊魚が泳ぎ、壁側には紫が色鮮やかなアケボノハゼやダンスをしているような動きのオドリハゼ、DERAWAN で見たのとは色・形が違う種類のピグミーシーフォース、ウミウシ等、右を見ればワイド、左を探せばマクロといった贅沢ダイビングとなった。

1本目終了後、KAKABAN の島へシュノーケルをしに上陸。ジャングルのような森林の中を歩いていくと、パラオの JERRY FISH LAKE の数倍の大きさはあるだろう海水の湖が広がっていた。太陽の光がこれ以上ないくらい湖に注ぎ、その光に誘われクラゲが水中でダンスを舞う。水底には名前の付いていないハゼやウミウシがたくさん生息している。まだまだ新発見がありそうな湖だった。

お昼の間に MARATUA へ移動。MARATUA のメインはなんといっても、CHANNEL で繰り広げられるバラクーダのパレード。

MARATUA の島は、アルファベットのUの字のように島が形成されている。潮が島内に流れるときにだけダイビング可能になる。というのも流れがかなり強く、潮が外洋に流れているときにダイビングをすると、何処までも流されてしまい、船へのピックアップが困難になる。島内に潮が流れているときであれば、流される範囲は狭まるので行方不明になる確率はぐんと減る。その為、島内に潮が流れているわずかな時間帯のみを見計らってダイビングを開始。

ただ、やはり流れがかなり強いことには変わらないので、ダイビング前のブリーフィングは他のポイントより念入りに行われた。

まずはコーナーの手前から本船エントリーで入り、コーナーまで流されていく。今回のダイビングポイント中でやはり一番流れが強いポイントだった。コーナーまで行くと、そこで少し根待ち。カレントフックを持ってくればよかったと少し後悔。岩にしがみ付き、ドロップオフを見つめる。ドロップオフへ向って泳いでいく回遊魚やサメを暫し眺め、チャンネルの中へ移動。その上ではバラクーダの大群が壁を作っていた。その数はどんどん増えていき、バラクーダの壁がどんどん厚くなっていく。流れの向きとは逆のほうに進行方向を向け、輪を乱すものもないその大群の姿には、カッコいい。という言葉しか浮かばなかった。2本目は丁度満ち潮と引き潮の間で流れが若干緩やかになっていた。流れが緩やかになったこともあり、バラクーダの群により近づくことが可能に。あまりの数の多さに近づくのに少々勇気がいった。バラクーダのパレードは1本目より大きさを増しており、そして柁ゲームのようにどんどんその形をかえていく。一つの大きなドーナツになったり、8の字になったり。その渦の中に入ってみると、渦の向こう側は、バラクーダで遮られる。上からの太陽の光だけで、その光が舞台のスポットライトのように感じられる。バラクーダのパレードは、観客を飽きさせることはなく、皆を興奮の渦へとどんどん巻き込んでいく。今までここまでの数のバラクーダを見たことが無かった私は、ただただその光景に、圧倒されっぱなしだった。パレードの余韻に浸りながらディングーで本船へと戻る途中、ふと上を見あげると、茜色に染まっていく空に、ちぎれ雲が広がっている。水中での光景が、空に膾炙しているようだと思いつつ、本日のダイビングは終了した。



## ダイビング4日目 MARATUA

午前中の時間は外洋に潮が流れているので、CHANNEL は午後に残し、午前中は MID REEF, LIGHT HOUSE へ。ここではニタリとの遭遇率が高いのだが、残念ながらニタリとの遭遇は、今回はできなかった。その代わりといっは何だが、ツバメウオの大群やギンガメアジ、カスマアジの群に遭遇。中々の迫力だった。マクロは3種類目のピグミーシーフォースや、個人的に大好きなパンダダルマハゼなど見ることができ、浅瀬に上がれば元気一杯のサンゴにそこを散歩しているアオウミガメなど見ることができた。

午後は、前日同様 CHANNEL へ。今回は、バラクーダのパレードを少し観察したら、その先のイーグルレイのポイントまで行こうということになった。まずはバラクーダを観察。前日よりやや群の数は減っているような気がするが、それでも十分な大きさ。バラクーダの下を、何気なく見てみると、巨大なコブダイが2匹。これはこれでかなり大きいのだが、やはり主役はバラクーダになってしまい、誰も見向きもしない巨大コブダイが、少し気の毒に思えた。パレードをしばらく観察した後、そのままインサイドに流れる潮にのり、チャンネルの中へどんどん流されていく。どれぐらいの距離だろうか。かなり流されていったと思う。途中キャベツ畑のように見えるサンゴ畑を過ぎ、しばらくすると大きなホールになっている場所に到着。そのまま流されていかないように、岩にしっかりつかまりながら下を覗くとイーグルレイがピュンピュン飛んでいる。4・5匹ぐらいいたのだろうか。自由自在に飛び回るイーグルレイは私の頭上を飛んでくれたりと、かなり楽しめた。イーグルレイを見た後、5Mぐらいの浅瀬で安全停止をしたが、かなり流れが強い。大きなサンゴの残骸に捕まってもサンゴと一緒に流されていく。しっかりと根を張った岩などにしがみ付かないと流されていく。一緒にのチームだった一人のカレントが壊れるほどの流れの強さだった。何もここで安全停止をしなくてもと思ったのだが、この先はダウンカレントとアップカレントが交互に入っていて渦を巻いているので、この場所で安全停止が一番安全なのだとあとからガイドに聞いた。

2本目に行く途中、その複雑な潮の流れが水面からでもわかるほど波の立ち方が異様だった。今回のクルーズ、最後の締めくくりは CHANNEL。ここでもう一度イーグルレイが見たかったのだが、すでに潮の流れはアウトサイド気味になっていた。これから徐々にアウトの流れが強くなる中で、長い道のりを逆らって泳ぐことは厳しいと判断し、途中で断念。チャンネル入り口に戻る途中、カクレマノミやサンゴと共生している魚と遊びながら、バラクーダのパレードの元へ。バラクーダの壁は水面近くまで上がっており、太陽の光がバラクーダのシルバの色にあたり、キラキラ輝きを放っているその姿は、大げさな表現かもしれないが、天から舞い降りてきた使者のような感じだった。クルーズ締めくくりにぴったりの光景だったと思う。



あっという間に終わってしまったクルーズだった。終わってみて今回の旅を振り返ってみると、いかに充実したダイビングだったかが改めてわかる。広い船内に親切で気さくなクルー。ポイント、ポイントへの移動も苦もなく快適に過ごせる。ダイビングから上がってくるころには、おいしい食事が出来上がっている。コックはタイ人なので料理はタイ料理がメイン。毎回数種類のおかずデザート。どれも美味しく、ついつい食べ過ぎてしまうほど。海ではマクロに癒され、そしてワイドで興奮の渦へ巻き込まれる。とても贅沢なひと時を過ごせた。今回たくさんの生物と出会えたが、きっとまだまだたくさんの生物との出会いが期待できると思う。11月からは雨季のシーズンがスタートしてしまう。風が強くなり海が荒れるのでシーズンオフに入る。その間はもちろん、クルーズもオフになる。次のシーズン到来までの海の準備期間。次のシーズン到来は乾季に入る6月ぐらいから10月ぐらいまで。そのときにはまた新たな出会いを用意してくれていることだろう。来シーズンもまた訪れようと思ってしまう魅力にあふれたところだった。

